

=本日および今週の礼拝・集会等=

※新型コロナウイルス対策のために会堂での礼拝他すべての行事を中止します。

※13:30より春秋苑にて、故海野節子さん・大島家埋葬式を親族と牧師で執り行います。

=今週の祈りの課題=

- 復活のイエスとの出会いを求めて祈りましょう。
- 生田教会のつながりが、祈りによって豊かに育まれるよう、願い祈りましょう。
- 石巻山城教会(現住 35, 礼拝 31, 経常 679.5万円)を覚えて祈りましょう。

=今週の聖書日課=

- | | | |
|----------|------|----------|
| 4/13 (月) | 1ペトロ | 1:1~12 |
| 4/14 (火) | 〃 | 1:13~25 |
| 4/15 (水) | 〃 | 2:1~10 |
| 4/16 (木) | 〃 | 2:11~22 |
| 4/17 (金) | 〃 | 3:1~12 |
| 4/18 (土) | 〃 | 3:13~22 |
| 4/19 (日) | ヨハネ | 20:19~31 |

=説教要旨=

イースターおめでとうございます。と言いましても、素直に喜ぶことができないなかでのあいさつになります。ただ、このような状況のもと複雑な思いでイースターを迎えることは、ふさわしくないと、あながち言い切れないのです。

なぜなら、復活なされたイエスに出会うマリアをはじめ弟子たちは、だれひとりとして復活を期待しつつ喜びに満ちあふれて、イエスに出会ったのではないからです。マリアをはじめ弟子たちは、十字架につけられ死なれたイエスの肉体の命、その存在こそがすべてであったという理解のゆえに嘆き悲しんでいるのです。彼女は泣きながら、天の使いたち、そしてイエスに会ったので、「女よ、」と呼びかけられました。続けて「なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか(13、15節)」と言われたほどでした。しかも彼女は復活のイエスを園丁だと思いついて、「あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか教えてください。わたしが、あの方を引き取ります、」と言わしめるほど、悲しみに打ちひしがれています。

わたしたちも常日頃「三日目に死人の内よりよみがえり…」と信条を唱え、決して肉体の命だけがすべてではないと言いながら、会堂の礼拝を中止し、なんとも言葉に表しがたい矛盾葛藤の内におかれています。重ねていますが、肉体の命に執着し、嘆き、悲しみ、涙を流す以外に何もできないようなひとがいるならば、わたしたちをはじめそういう人たちは、皆、イースターを迎えるにふさわしい者

として招かれているのです。

すでに復活のイエスに出会っているのに園丁ではないかと勘違い、誤認している、マリアは、わたし(イエス)を「みる」ことができるのか、認識できるのか?、と。肉体の命に執着しているかぎり、マリアにとってイエスは、決して救い主ではなく園丁なのです。言葉をひるがえせば、園丁として目の前で語りかける人は、霊の命において見るならばキリストなのです。

そこでイエスは「マリア」と呼びかけられました。もはや「女よ」ではない、他にもいる女のうちのだれかではなく、「マリア」と、彼女ひとりを名指して呼びかけたのです。ここでマリアは気がつきました。復活のイエスとの出会いは、おおぜいのうちのひとりの「女」ではなく「マリア」というひとりの人格において起こった出来事なのです。

肉体をもって生きているわたしたちにとって、肉体の死が絶望であり、肉体の命の存在が希望であります。十字架の死は、肉体の命が絶望したところから、はじめられる信仰の内的なたたかいです。復活を信じることは、億に一の確率で賭けるようなことであるかもしれせん。歴史をとおして過去に証言されたその信仰の内実は、霊の命が希望の根拠であります。だから肉体の命がこうむる危機、たとえそれが肉体の命の死であろうとも、起こりうるすべての悲劇、悲嘆、艱難…、今わたしたちが、肉体の命において直面している現実の苦難に、何ものにも代えがたい意味を刻む、そんな道に、一步を踏み進める決断とはならないでしょうか。